

## B-2

## アラビア語チュニス方言のモダリティ表現と主題人称

熊切拓 (takukuma@t3.rim.or.jp)

### 0. 本発表のテーマ

中央アジアから北アフリカに至る広大な地域で用いられている現代アラビア語諸方言は、言語的、文化的に古典アラビア語との共通点を保持しながらも、音韻、語彙、形態、統語的にそれぞれ独自の特徴を発達させてきた。ここで扱うモダリティに関わる言語形式もその1つである。しかし、その記述研究においては、これまでのところ語彙論的に解釈されるか、動詞に随伴する現象として捉えられることが多く、モダリティという枠組みでの議論はこれからの課題である。本発表は、北アフリカのチュニジア共和国の首都チュニスで話されているアラビア語変種（これ以降、チュニス方言と呼ぶ）の命題提示に関わるモダリティ（Propositional Modality）表現を取り上げ、文法的な主題の人称に着目しながら、その言語形式の体系化を試みる。

### 1. チュニス方言の概略

この言語の動詞には、人称（1./2./3.）・単複（sg./pl.）・性（m./f.、ただし3人称単数のみ）によって活用する完了形（perf.）と未完了形（impf.）の2系列がある（詳しくはGibson 2009を参照されたい）。未完了形においては、古典アラビア語に存在する直接法・接続法・希求法の法の区別は少なくとも形態的には失われている。名詞には男性・女性の2つのクラスがあり、単複の区別も持つ。名詞は格変化しないが、人称辞には、対格（acc.）、属格（gen.）に加えて主格（nom.）の3系列が存在する（熊切 2010。右の表を参照）。主語は動詞文の場合は動詞活用によって示されるため、これに対応する名詞や人称詞は文においては必須の要素ではない。語順はVO型であり、独立したSはOの前後に現れうる。また、この言語は主語や目的語、前置詞の補語を文頭に置くことで主題化することができる。ただしその場合には、主題以降の文中において主題に一致する人称接辞（動詞の場合は屈折辞）が再び現れる。次の例(1)では、主題がbi:ru:、再述される人称辞が前置詞fi:-に付された3人称単数男性形の属格人称辞-hである。

		対格	属格	主格
単数	1人称	-ni:	-i:	-ni:
	2人称	-k/-ik		
	3人称	男	-h/-u:	-h/-u:/-w
		女	-ha:	-hi:/-i:
複数	1人称	-na:		
	2人称	-kum		
	3人称	-hum		

。主語は動詞文の場合は動詞活用によって示されるため、これに対応する名詞や人称詞は文においては必須の要素ではない。語順はVO型であり、独立したSはOの前後に現れうる。また、この言語は主語や目的語、前置詞の補語を文頭に置くことで主題化することができる。ただしその場合には、主題以降の文中において主題に一致する人称接辞（動詞の場合は屈折辞）が再び現れる。次の例(1)では、主題がbi:ru:、再述される人称辞が前置詞fi:-に付された3人称単数男性形の属格人称辞-hである。

- (1) w-bi:ru:      haʔʔ      fi:-h      ka:tib [I-214]  
 そして-事務所    置く perf.3.sg.m.    ~中に-3.sg.m.    秘書  
 「そして、事務所はといえば彼はそこに秘書を置いた。」

本発表では、このような再述性のある文法的な主題を主題とし、意味的な、もしくは情報構造的な主題とは区別して扱う。

音韻表記にさいしては、主としてIPAに依拠し、咽頭化音は補助記号ʕ/によって示した。母音は/a, i, u, a:, i:, u:/の6種であるが、咽頭化音や喉音による強い影響を受けるため、その音声的実

現は複雑である。

本発表で用いる資料は、発表者が現地調査によって収集したものである。チュニス方言による4巻本の物語集及びその朗読の録音 (Al-ʕIrwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z [1989] hika:ya:t al-ʕIrwi: Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ya li-l-Nafr.) から採用した例文にはその末尾にローマ数字による巻数とアラビア数字によるページ数を付した。朗読を含め調査に協力して下さったOuacel Krir氏とFarouk Herzi氏にはここに感謝を申し上げる。

## 2. チュニス方言のモダリティ表現

モダリティ論においては、モダリティは出来事のモダリティ (Event Modality) と命題提示のモダリティ (Propositional Modality) とに大別され、後者は「命題の真理値、もしくは事実性に対する話者の態度」に関するモダリティであるとされる (Palmer 2001:8)。本発表が扱うのはこの後者のものである。

この命題提示のモダリティには意味的に多様なものが含まれる (否定もこれに含まれるが、紙幅の関係上、これは省略する)。しかし、今回の発表では、意味的な分析というよりも、統語的な特徴に基づく分析に重点を置く。チュニス方言には、この命題提示のモダリティ表現には、単一の副詞によって作られるものと、そうでないものの2種が存在する。このうち後者のものが本発表の主題に関わるが、対比のために副詞によるものを次にあげる。(2)のba:lik 《もしかしたら》は推量、(3)のya:xi: 《ところが》は予期しない結果を表す。なお、例文中の否定において現れる接尾辞-ʃは否定を表すものではないが、ここでは否定辞として扱う。

(2) **ba:lik**            ma:-yar<sup>ʕ</sup>ð<sup>a</sup>:ʃ [II-103]  
もしかしたら    否定-満足する impf.3.sg.m.-否定

「もしかしたら彼は満足しないかもしれない。」

(3) a:na: ʃaqqi:t            it<sup>ʕ</sup>-t<sup>ʕ</sup>ri:q    **ya:xi:**            ð<sup>ʕ</sup>arbit-ni:            karhba  
私    横切る perf.1.sg. 定-道    ところが    叩く perf.3.sg.m.-acc.1sg. 車

「道を横切ったら、車に轢かれた。」

副詞以外の命題提示のモダリティ表現では、形式的には、提示される命題の前にモダリティ要素とそれに付随する何らかの人称要素 (人称接辞、屈折辞) が現れる。これを、模式的に表すと(4)のようになる。

(4) [モダリティ要素+人称要素] [命題]

(4)でいうモダリティ要素とは、不変化のモダリティ辞もしくは動詞である。モダリティ辞の場合は、主格人称辞もしくは対格人称辞が人称要素として現れる。動詞の場合は、動詞自体が活用、したがって人称要素が屈折辞の一部として組み込まれている場合と、動詞が「非人称」で人称要素が属格人称辞として現れる場合がある。

ここでこれらのモダリティ要素と共起する人称要素について見てみると、多くの場合では命題に含まれる主語に一致している。以下、いくつかの例を挙げる。

まず、モダリティ辞を取り上げる。モダリティ辞 ha:-, r<sup>a</sup>a:-, m<sup>a</sup>a:- には主格人称辞が接尾され、後に続く命題を、ha:- の場合は直接的に、r<sup>a</sup>a:- の場合は新情報として、m<sup>a</sup>a:- の場合は旧情報とし

て提示する意味機能を持つ（熊切 2010）。

- (5) **ha:-ni:**                      zibt-l-ik                      qis<sup>s</sup>s<sup>i</sup>t-si-l-hadda:d [II-143]  
直接提示-nom.1.sg. 持ってくるperf.1.sg.-〜に-acc.2.sg. 物語-氏-定-鍛冶屋

「鍛冶屋さんの物語をあんたに持ってきたぞ！」

- (6) **r<sup>a</sup>:-ni:**                      ma:-fhimt                      fay [II-138]  
新情報提示-nom.1.sg. 否定-理解するperf.1.sg. 何も

「私には何にもわからないのです。」

- (7) **m<sup>a</sup>:-k**                      smaʕt-u:                      a:f qa:l  
旧情報提示-nom.2.sg. 聞くperf.2.sg.-acc.3.sg.m. 何 言うperf.3.sg.m.

w-juft-u:                      ki:fa:f                      ɖ<sup>r</sup>ab-ni: [I-33]  
そして-見るperf.2.sg.-acc.3.sg.m. どのように 殴るperf.3.sg.m.-acc.1.sg

「彼が何を言ったか聞き、そしてどんなふうにわたしをぶったか見たでしょ。」

モダリティ辞θrant-は対格人称辞とともに命題の前に現れ、《〜だと分かった、だったんだ》という発見や驚きを表す。

- (8) qbal    kunt    nɖ<sup>s</sup>unn    inti:    mutrabbi:    amma:    tawwa    **θrant-ik**                      mu:f  
以前 (過去) 思うimpf.1.sg あなた 良い育ち しかし 今    〜とわかる-acc.2.sg. 否定

mutrabbi:  
良い育ち

「以前は君が育ちがよいと思っていたけど、今よい育ちではないということが分かった」

なお、このθrant-もしくはɖ<sup>r</sup>ant-, ɖ<sup>s</sup>nant-は動詞ɖ<sup>s</sup>ann《考える》の非方言的な完了形1人称もしくは2人称単数形ɖ<sup>s</sup>nant《〜とわたし・あなたは考えた》に由来すると見られる。チュニス方言でのこの動詞の1・2人称単数完了形はɖ<sup>s</sup>anni:tとなる。

命題の前に置かれた名詞haqq-《権利》、ka:r<sup>s</sup>-《礼儀》と対格人称接尾辞の結合体は、ある行為がなされるべきである・べきであったという話者の判断を表す。

- (9) ma:-**haqq-na**:-f                      qaʕdna:    ya:di:  
否定-〜べき-acc.1.pl.-否定 座るperf.1.pl. あそこ

「我々はあそこにいるべきではなかった。」

- (10) **ka:r<sup>s</sup>-ik**                      ʕmalt                      ki:f-hum.  
〜べき-acc.2.sg. するperf.2.sg. 〜のように-gen.3.pl

「あなたは彼らのようにするべきだった。」

モダリティ要素が動詞の場合にはまずそのモダリティ動詞が命題の動詞と一致している場合がある。動詞walla:《〜になる》は、文頭に置かれると、事態が最終局面に到達したという話者の判断が示される。

- (11) **walla:**                      daqq [II-286]  
perf.3.sg.m. ノックするperf.3.sg.m.

「彼はついにノックした。」

(12) t<sup>s</sup>laʕ《上る》は、想定とは反対の事態の露見とその驚きを表わす。動詞は、例文中に現れていない女性名詞munga:la《腕時計》に一致している。

(12) tʰalʃit timʃi:  
 上るperf.3.sg.f. 行くperf.3.sg.f.

「(壊れていると思っていたが、この腕時計) 動いた。」

動詞が「非人称」で人称要素が属格人称辞として現れる場合を挙げるが、この「非人称」とは、実際には3人称単数の男性・女性形である。動詞δʰar《現れる》に前置詞l-《〜に》と属格人称接尾辞が接尾されると、《〜のように見える・思える》という視覚や状況からの情報を元にした推測を表すモダリティ表現となる。この場合、動詞の形は3人称単数男性形のまま不変化である。

(13) ma:-yuðʰur-l-i:-ʃ ka:n ba:ʃ-nimʃi:  
 否定(推測)perf.3.sg.m.-〜に-gen.1.sg.-否定 〜かどうか 未来接辞-行く impf.1.sg.

「私は行けそうにないな。」

これと同様の形式を持つのが、男性形ではなく、3人称単数女性形が常に用いられるrʰasʰsʰa:t-l-属格人称辞《結局、〜にとって〜となる、とどのつまりは》であり、これは事態のあり方が他にありえないことを示す(動詞rʰasʰsʰa:は《(船が) 寄港する》の意)。

(14) rʰasʰsʰa:t-l-ik mʃi:t li-sfa:rit-zapō  
 結局は〜に-gen.2.sg. 行くperf.2.sg. 〜に-大使館-日本

「結局のところ君は日本大使館に行った。」

### 3. モダリティ表現の人称要素と主題

これまでの例は、モダリティ辞なりモダリティ動詞の人称要素が命題の主語と一致している場合であった。とはいえ、命題の主語ではなく、命題の主語以外の要素の人称に一致していると場合もないではない。

次の例では、モダリティ辞mʰa:-に接尾されている人称辞は、命題の主語である1人称複数ではなく、文頭に現れた主題、そして命題の目的語でもある3人称単数男性である。

(15) ha:ða: mʰa:-hu: nzawwzu:-h [II-228]  
 これ 旧情報提示-nom.3.sg.m. 結婚させる impf.1.pl.-acc.3.sg.m.

「こいつはといえば、我々は彼を結婚させよう。」

また、次の例でもmʰa:-に接尾されている人称辞は、動詞の主語ではなく、それに接尾されている3人称単数女性の対格接辞に一致している。

(16) mʰa-hi: fassirt-ha:-l-ik nha:r-lahad illi: fa:t  
 旧情報提示-nom.3.sg.f. 説明するperf.1.sg.-acc.3.sg.f.-〜に-gen.2.sg. 日曜日 関係詞 先週の

「前の日曜日にそれは説明してあげたでしょう。」

これらの例で考えられるのは、モダリティ要素の人称とは、主語のそれではなく、命題において主題化された人称なのではないかということである。

次の(17)では、ha:k-itʰ-tʰufla《件の娘》は、繰り返される動詞ʃarsitの主語であるにしても、命題内の文頭に現れているため主題であると考えられる。したがって、その前のモダリティ動詞はひとつ飛びに動詞の屈折辞の主語人称に一致しているというよりも、直後の主題に一致していると考えの方が自然であろう。

- (17) walla:t ha:k-it<sup>ʕ</sup>-t<sup>ʕ</sup>ufla ʕarrsit uxt-ha: l-u:la: ʕarrsit  
 perf.3.sg.f. あの-定-娘 結婚させるperf.3.sg.f. 姉妹-gen.3.sg.f. 定-最初の 結婚させるperf.3.sg.f.  
 uxt-ha: θ-θa:nya [II-278]  
 姉妹-gen.3.sg.f. 定-2番目の

「その娘は上の姉を結婚させ、その次の姉も結婚させるということとなった。」

モダリティ要素の人称は確かに命題の主語に一致していることが多いが、以下の例のように、主語が主題となっている場合を考慮すれば、モダリティ要素と共起する人称要素を主題と一致するものと解釈するのに矛盾は生じない。

- (18) l-ya:qu:ta r<sup>ʕ</sup>a:-hi: swa:t ʕaʕra a:la:f di:na:r [II-125]  
 定-宝石sg.f. 新情報提示-nom.3.sg.f. 値するperf.3.sg.f. 10 1000 デイナー

「この宝石は1万ディナールの値ですぞ。」

- (19) il-kalb m<sup>ʕ</sup>a:-hu: ki:f yʕu:m yhall fumm-u: [II-260]  
 定-犬sg.m. 旧情報提示-nom.3.sg.m. ~の時 泳ぐimpf.3.sg.m. 開くimpf.3.sg.m. 口-gen.3.sg.m.

「犬というものは泳ぐ時に口を開く。」

これまでは、モダリティ要素と共起する人称要素を後続する命題内の要素の主題化と関連付けてきたが、その人称に一致するものが命題に含まれない場合がある。それが(13)で取り上げた動詞δ<sup>ʕ</sup>harによるモダリティ表現であり、実際にはこちらの方が多い。

- (20) δ<sup>ʕ</sup>har<sup>ʕ</sup>-il-ha: lli: r<sup>ʕ</sup>a:zil-ha: ma:-ha:ʒt-u:-ʕ bi:-h  
 (推測)-~に-3.sg.f. 関係詞 夫-gen.3.sg.f. 否定-必要である-gen.3.sg.m.-否定 ~を-gen.3.sg.m.  
 w-ma:-yilbs-u:-ʕ bilkull [II-251]  
 そして-否定-着るimpf.3.sg.m.-acc.3.sg.m.-否定 まったく

「彼女には夫がそれ（衣服）をもう必要とせず、もう着ないように思えた。」

- (21) a:na: yuδ<sup>ʕ</sup>hur-l-i: ha:k-l-fu:qa:ni:ya mta:ʕ-ik amma: il-lu:tʕa:ni:ya  
 私 (推測)-~に-gen.1.sg. あの-定-上のもの ~の-gen.2.sg. しかし 定-下のもの  
 ma:-kunt-ʕ fa:tʕin bi:-ha: [I-198]  
 否定-(過去)-否定 気づいている ~に-gen.3.sg.f.

「上にあるヤツ（カバン）があんたので、下にあるヤツにはあんたは気づいていなかったように、俺は思うな。」

文全体の主題a:na:《私》が文頭に現れる(21)のような例からも分かる通り、この属格人称辞もまた主題の人称と一致していると解釈することができよう。したがって、モダリティ辞やモダリティ動詞に付随する人称は、文全体であれ、命題であれ、主語というよりも主題化された人称であるとみなすことができる。

#### 4. 主題の人称の役割

副詞型を除く命題提示のモダリティ表現において、人称要素が現れる場合には、主題の人称に一致していると考えられるということは、この主題の人称がこれらのモダリティ表現の成立する「場」として機能しているということでもある。

アラビア語研究では、動詞活用における人称性 (Person) が必須であることが指摘されている (Eid 2008: 709) が、通常この人称性は活用される動詞の主語に結びつけて解釈される。しかしながら、本発表で取り上げた例からは、モダリティ表現においては必須なのは主語ではなく主

題の人称性であると解釈したほうがより多くを説明する。これを模式的に表せば(22)のようになろう。主題についていえば、これはない場合もあり、またある場合には命題の外か内かのどちらかに現れうる。

(22) (主題) [モダリティ要素+主題に一致する人称] [(主題) 命題]

ここで、この主題の人称について考察してみると、それはこれらのモダリティ表現において、形態的には動詞の屈折辞、主格・対格・属格人称接辞として多様に現れている。言い換えるならば、形式上は区別されるこれらの人称要素は、命題提示のモダリティ表現においては、形態論的な垣根が取り払われ、意味的には共通して主題の人称を表すことになる。

この現象を解釈するにあたり、おそらく2つのアプローチがあろう。ひとつは意味論的な解釈である。すなわち、形態論的形式とは関わりなく「論理的な主題」というものを想定し、これらの人称要素が論理的に主題なりを表示しているとみなす考え方である。しかしながら、この解釈は、ある人称要素がどの場合に「論理的」になり、それ以外は「形態論的」になるのかを明らかにしない。つまり、ある対格人称接辞が、どの場合に目的語の人称に一致し、どの場合に論理的に主題に一致するのかの基準が示されていないのである。そこで、もうひとつのアプローチとして、統語的視点を導入したい。それは、これらの人称要素が主題と一致するのは、その要素が統語的に主題化されている時のみであるとするものである。すなわち、ここでいう主題化とは、主題そのものを除いて文頭に現れ、文のその後の部分において何らかの人称要素として再述されるという、本発表の冒頭で触れた文法的な主題となることである。

これを別の言葉で言い換えるならば、人称性を媒介として主題とモダリティがこの言語においては関係づけられることになるが、少なくとも統語論的なレベルで言えば、主題にしても、モダリティにしても文全体に関わるものであるため、このような関係は想定しうるものだと言える。

さらに、この命題提示のモダリティ表現に現れる人称要素における形態論的違いが、主題化においては解消するという現象も、主題なり、モダリティなりが形態論よりも上の統語論的レベルで働いていることに由来していると考えられる。

## 5. 結論

本発表ではアラビア語チュニス方言の命題提示のモダリティ表現を扱い、このモダリティ形式に随伴する形態論的に多様な人称要素が、統語的に主題化されることによって命題もしくは文全体の主題に一致しているということを明らかにした。

## 参考文献

- Eid, Mushira (2008) "Pro-drop" Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, Vol. III. ed. Kees Versteegh et al. 705-713. Leiden/Boston: Brill.
- Gibson, Maik (2009) "Tunis Arabic." Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, Vol. IV. ed. Kees Versteegh et al. 563-571. Leiden/Boston: Brill.
- 熊切拓 (2010) 「アラビア語チュニス方言のモダリティを表す小辞」 『日本言語学会第141回大会予稿集』 372-377. 日本言語学会.
- Palmer, F. R. (2001) Mood and Modality. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.